

宵闇 I S 草紙

湯豆腐殿下

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は現代、世界はISなんて大発明によつてあつちでドタバタこつちでドンパチと大忙し。

それは世界の裏側に厚かましくもひっそりと、大手を振って暮らしている人たちも無関係ではいられないくらいに。

コノお話はそんな裏側の特殊技能持ち達がヒョッコリとIS学園に入学したりしてみちやうお話です。

いぜんじぶあんで投稿していたもののリニューアル版です。

目次

ドイツにて	1
日本?にて	14
IS学園前にて	25
アリーナにて	31
アリーナにて2	42
片隅にて(反省中)	49
片隅にて(ファーストシフト)	56
片隅にて(試験終了)	61
学生寮にて(はじめまして)	66

ドイツにて

—ドイツ国内—

ここはかつてドイツ国内において軍需産業の拠点として繁栄と栄光を誇った兵器工場の成れの果て、所謂廃工場と呼ばれる建築物の一角。

廃工場とは言え元々は兵器工場、それを支える強化コンクリートの壁は普通の工場のそれを遥かに越える厚みと強度を誇っており、事実その強度が破格の為に通常の重機では解体が困難とされ建物自体の取り壊しが先延ばしにされていたのである。

しかしこの時、その強固な筈の強化鉄筋コンクリートの壁をぶち抜いて薄暗い通路に叩き付けられた人影が居た。

「グハッ、ゲホッゲホッ！　　っこの化物め!!」

はじき出された通路に膝を付き大きく咽込みながら悪態をつく人影の正体は『IS』
……インフィニットストラトスと呼ばれる現代において世界最強の兵器をその身に纏った長い髪の少女であった。

胸を押さえ、嘔吐を堪えるために全身で小さく痙攣を起す彼女の口端から流れる血は顎先から床に向ってポタリポタリと滴り落ち、その身に纏ったISは装甲の大半を破損

させている。

この時 I S 関係者が彼女の I S を見たなら、口をそろえて何の間違いだと悲鳴を上げるだろう。

彼女の装着している I S は先週米国が発表した最新型第 2 世代 I S、機体名『ストライク・イーグル』性能だけで評価するなら現時点で世界最高水準をたたき出した文字通りの最新鋭機が何者かの手によってスクラップ寸前まで追い込まれているのだ。

それは搭乗者である彼女も同じであったらしく、整った顔を苦悶と憤怒に歪め、自身が突き破って出来たコンクリート壁の穴の先を睨み付けている。

カツン……カツン……カツン

無人と化した灰工場の中に靴音が響き渡る。

その足音はあくまで歩調を変える事無くゆっくりと、しかし確実に彼女の元へと近付いてくる。

その距離を 10 m …… 4 m …… 1 m と縮め、壁の向こうから姿を現したのは一人の

『男』であった。

「よお、生きてるかあ?」

ちよいと見知った仲間へ気軽に声を掛けた、そんな雰囲気纏いヒヨッコリと顔を出した男は2 m近くの長身で、癖の無い黒髪は三つ編みにまとめて背中に垂らされている。

上下共に黒のスーツの上から同じく黒のロングコートを羽織った体は一見細身にも見えるが、その実

、鍛え上げられた筋肉が納められていることを、たった今ISごと『蹴飛ばされ』コンクリート壁をぶち抜くハメに陥った少女は知っている。

そして何よりも目を引くのは、ともすれば酷薄にも見える整った顔立ちに浮かぶ猛獣のような獰猛な笑みと、顔の右側を半分ほど隠した前髪の下で右目を覆っている大きな眼帯である。

男は少女が健在であることを確認すると、表情はそのままに相変わらずの気軽さで告げる。

「なあ、フオールだったっけ？ とりあえずアンタの無事は保障してやっからよ、ここらで大人しくケツ捲くって引き上げちゃくれね えか？ お互い面倒事は これっくらいにしとこうや」

「ゲホッ、……オータムだっ！ 知ってて間違えんな！」

「どっちも日本語なら秋じゃねえか、気にすんなよ」

言葉を掛けられた少女の顔は憎々しげな憤怒の形に歪められる。

さもあらん、彼女こそは世界の裏側を暗躍し社会に混乱と秩序を齎す『亡国機業』所属のエリートエージェント、通称『オータム』。

まだ若輩とは言え彼女の上司の命令の元、数々の破壊工作・誘拐・戦闘を成功させてきた腕利きの工作員なのだ。

その自分がISすら使うことが出来ない下等な男に傷一つ付ける事が出来ない上、あろうことか『素手』で戦闘不能寸前にまで追い詰められている。

「畜生テメエつ、テメエだけはぶっ殺してやるつー！」

スクラップ寸前の体とISを、生来の凶暴性で鞭打ち無理やり動かしたオータムは目の前の男に襲い掛かる。

右手には量子変換によって呼び出したサブマシンガン、左手には近接用の大型ナイフ。

「死いつ、ねえええええ！」

響き渡る轟音と共にサブマシンガンから火を噴き吐き出される鉛弾。サブマシンガンと言ってもそこはIS用のサイズである、飛来する弾丸のサイズ・威力共に人間が使用する銃機関銃のそれを遥かに越えた暴力は……しかし男に降り注がれることは無かった。

「なあつ、また消えやがった!」

先程まで男の立っていた場所はマシンガンの洗礼を浴び、見るも無残な瓦礫になつたにも関わらず、肝心の男はすでにその場に居ない。

「畜生つ、ハイパーセンサーにも反応無しだど?! 手前えは煙か何かかよつ!!」

ISを纏う者がまず始めに受ける科学の恩恵はハイパーセンサーによる超感覚といつても過言ではない。元々宇宙空間での活動を想定して開発されたISは、宇宙を音速で飛び交うデブリ回避や長距離間での連携を考慮し、ハイパーセンサーとのリンクによつて搭乗者の脳神経のクロックアップや遠距離可視化・感覚鋭敏化・長距離通信を可能としている。その性能をフルに使用したならば、建物の一室内における人間の挙動などスローモーション以下のスピードで知覚可能だ。

しかし、しかし男は『気配以外』の全てを消し去つてオータムの知覚から消えてしまつている。この通路内に、しかもすぐ近くに居るはずなのにハイパーセンサーに何一つ引つ掛からないと言うこの現状。

オータムは通常見せることの無い動揺を露わにして、ただその場にてわめき散らすことしか出来なかつた。

そんな彼女の耳元で呟かれる男の声

「煙か、確かに例えとしちや当たらずとも遠からずだな」

男の声は確かに至近距離、所謂耳元で囁かれるそれだ。しかし目で追ってもそこには誰も居ない、ハイパーセンサーの超感覚で周囲の情報を拾っても、半径20m以内に自分以外の動体反応が見られないのだ。

確かにそこにあるのに視認出来ないなど、匂いはするのに見ることが出来ない煙草の『煙』そのものだ。

そんなオータムを無視して男の声は続く。

「確かにお前さんのISについてるハイパー・センサーは優秀だろうよ。間違いない。センサーに俺は引つ掛かっているだろうさ、そりやもう心音から筋肉や骨の軋む音一つ一つまでな」

「ざけんなっ、だったら……!」

「だったら何故それが知覚出来ない!? そんなオータムの疑問に答えるかのように男の囁きは続く。」

「問題はセンサーからの情報を受け取るお前さんの方にある。なあ『路傍の石』って知ってるか? そこら辺に転がっている石ころ。って意味で取ってもらって構わねえんだが、お前さんは俺と向かい合っているこの通路に転がっているコンクリートの破片や舞い落ちる埃を一々認識してるか?」

「誰がそんな……な、ってまさかオマエ!」

「その通り、つまり俺は自分の存在をお前の意識の死角に隠してるんだ。いくら高性能なセンサー使っても、それを見ている本人が俺だと認識できていないんじゃないかなあ？」

人間は視界の外にある物を見ることは出来ない。もし視界の外に何かがあると感じたならば、それは視力以外の感覚器官に加え、今までの人生で培ってきた『直感』意識』と言う6つ目の感覚器官で捕らえたと言う他にない。

故にハイパー・センサーと言う増幅装置は確かに彼女の五感を極限まで高めるだろう、彼女のような戦闘者の直感は間違いなくソレを余す事無く捕らえるだろう。

それが意識を向けた対象ならば。

「ご名答、俺は俺の存在をそこら辺に転がってる石ころのレベルまで薄めてるんだ、意識を向けなすぎや認識も何もあつたもんじゃ無えだろ？ ああ、ちなみに俺の現在地なんだが……」

不意にオータムは自身の左側に影が差したことを察知する、今まで沈黙を続けていたハイパー・センサーがまるでさつきから発していたように警報をかき鳴らす。

「お前の左側にくっついてるんだなコレが♪」

「な!? つくうっ!」

脊髄反射で男の顔に向かい左手の大型ナイフを突き出すオータムであったが、それはこの場において悪手以外の何者でもない。男は首を捻ってナイフを肩越しに避ける。と左手で無防備なオータムの左胸、まだ固さの残る成熟しきらない乳房をその大きな手で驚掴みにして

「はあ、勿体無え」

「な……グアアアッ!!」

左の乳房ごとその下にある肋骨をまとめて握りつぶした。

「ああ、何で俺の攻撃が通じるのかって事だがな、コレは話すと長くなるんで割愛。絶
対防御も万能じゃないって事で納得しといてくれりや良いき……まあもつとも」

そう言いながら男はオータムの右腕を掴むとそのまま後ろへ捻り上げ、中途無く肩の関節をはずして右腕をへし折る。

「もつともお前さんが今後も荒事を出来る体で居れば……な」

返事は無い、胸骨を握りつぶされた時点で彼女の意識は落ちていた。しかし男はオータムを破壊する手を止めようとはしない、そのまま気を失った彼女の頭に手を掛ける。と。

彼女に掛けた手を離し、全力で後ろに飛びのいた。

「そこまでにしておいてくれると嬉しいわ。その子は私の恋人でね？それ以上壊されたら私泣いてしまうから」

飛びのいた男の視線の先にはグレーのツーピースを纏った金髪の女性。歳の頃は男と同じ20歳前後と言った所だろうか、彼女はたった今まで戦闘が行われていたこの空間に似つかわしくない穏やかな雰囲気とその顔に浮かべ、先程の男と同じく「ちよつと気になるブティックがあつたから寄つて見ました」と言わんばかりの気軽さで気絶したオータムへと近付いていく。

「あらあら、仕方のない子ね。絶対油断しちゃダメよつて念を押したのに、帰つたらお仕置きをしなくちゃいけないわ」

女性はオータムを苦も無く抱え上げると男の方へ向き直り、先程の男がそうであつたように、彼に対して友人のような気軽さで問い掛ける。

「そんな訳で、この子は私が叱つておくから今日はこのまま避かせて貰えないかしら？」
交戦の意思は無し。そんな彼女の雰囲気を見て取つた男は自身の纏う殺気を霧散させ、ポケットから煙草を一本取り出し一服し始める。

「あゝ、持つてけ持つてけ。目が覚めたら『お大事に〜♪』つて伝えといてくれ」
男は二人に興味を無くしたかのように煙草の煙を燻らせ、壁の穴から元来た場所へ帰ろうとする。そんな男に背後から先程の女性の声が投げ掛けられる。

「私の名前はスコール、亡国機業のスコール・ミューゼル。ねえ素敵な東洋人、あなたのお名前教えてくれない？」

異性が、いや同性が見ても心を奪われるようなウインクと共に投げ掛けられた言葉に歩みを止めた男は、首だけ振り返りその口元に笑いの形を作り答えた。

「俺の名前は……、エドワード・ロング。そんじやスコール、縁が合ったらまた会おう」
男の姿が完全に消え去った後、通路には満身創痕のオータムを抱えるスコールが残される。

「隻眼・黒尽くめの東洋人……、あなたが『スクリーミング・クロウ』なのね。ええエド、また縁が合ったら」

そう呟いた彼女の姿は次の瞬間通路から瞬く間に消え去り、残されたのは破壊し尽くされた廃工場の通路のみとなった。

「いーやイヤイヤ、無えわあ。……餓鬼一人誘拐するのにISとか、マジで何考えてるんだン引きだわ！」

完全に緊張を解き、エドワードと名乗った男は根元まで吸い終わった煙草を通路に投げ捨て、先程来た通路を逆しに帰りながら

そう独りごちる。

とある事情から仕事先で一時的に『アルバイト』として雇われた彼の元に雇用主から伝えられたオーダーは、『たった今誘拐された、日本代表 I S 操縦者の身内、その身柄の確保および障害の排除』であった。

彼にとつてその程度であればさしたる労力でもなく、逆にその程度でおぜぜを頂けるなら割の良いバイトだよなあ、と喜び勇んで呐喊した廃工場のワンフロア。

椅子に目隠しをされて縛り上げられた 10 歳ほどの少年の周りに居る男達を駆逐してミツシヨンコン

プリートと思つた矢先にまさかの I S による攻撃である。

「ドヤ顔でキメて見たけどアレは怖かつたぞオイ、何だよあのフオールって女!!」思いつきり国家代表クラスじゃん?」

I S との戦闘に勝利した彼ではあつたが、楽勝に見えたのは表面上の事で実際にはオータムの技量も相まって彼の心胆を寒からしめる程の死闘であつたのだ。

因みにオータムの名前を間違えたのを直すつもりはサラサラ無いようだ。

ともあれ彼にしては結構ヤバめの戦闘だつたことは間違いなく、それ故に障害を排除

した彼はそれ以上の妨害は無いと確信して気楽に先程少年が監禁されていたフロアへと足を進めるのであった。

「いよ／＼少年、無事か？」

到着したフロアには倒れ伏す十数人の男達、その誰もが人間として曲がってはいけな場所、曲がってはいけない方向に両手足をへし折られて昏倒している。

いずれも苦悶の表情を顔に貼り付けてはいるが、誰一人うめき声を上げずに気絶している辺りにエド

ワードの強襲から制圧までの手際の良さが見て取れる。

そんな中、倒れ伏す男達の中央で猿轡を噛まされ目隠しをされた黒髪の少年の下へ、エドワードは鼻歌交じりに近付いていく。

無論倒れ伏した男達はガン無視して踏み付けつつだ。足元でポキンとかグシヤリという何やら人の体から鳴って欲しくない嫌さげな音が響くが、当の本人は鼻歌交じりに至って平常である。

「む／＼つ、む／＼つ！」

声を掛けられた少年は声の主の気安さから自分の救助だと瞬時に判断。縛られた椅子を軋ませながらエドワードへと必死に助けを求める。

「おうおう、誘拐されたつてのに元気良いなあ。ちよいと待つてな、今縄あ助けてやつ

から……ん？」

少年の戒めを解こうとエドワードが椅子に手を掛けたその時異変は起こった

「……………あ」

「ん？ 何だこの音？」

遠くから聞こえる女の声と破砕音、次第に大きくなるフロア全体の振動。

……そして

「無事かつ、一夏（いちか） ああああつ!!」

「おああああつ！ へぶつ！」

突如壁を切り裂き薄桃色のISで突撃してきた、少年と良く似た顔立ちの女性にエドワードは先程まで歩いてきた通路へと勢い良く弾き飛ばされ、錐揉み4回点半3捻りしつつ退場することと相成った。

日本?にて

—5年後日本—

「ぬおおおおあああつ!!」

とある古びた畳張りの和室で、一人の男が布団を跳ね上げ飛び起きる。

男は目を見開いた真剣な顔で

右を見て

左を見て

自分の体をペタペタ触って無事を確認すると、今まで飲み込んでいた息を大きく吐き出した。

「……つぶはあゝっ！　　まったく嫌な夢を見ちまったなあオイ！」

再び布団へうつ伏せにダイブすると、男は今見た夢を思い出し改めて大きな溜息をついた。

「ブリュンヒルデ（世界最強）の突進（チャージ）をモロに喰らうとか、そりゃトラウマ

にもなるわな。……にしてもあれから5年も経ってんのに、なんで今更あんな夢を見るかねオレは」

そう言いつつ男は壁掛けの時計に目をやると

「つつたく、まだ早いじゃねえか。さあてやな夢は無かったことにして寝なおすべ」
再度夢の世界へと全力でダイブするのであった。

「おお〜い竜の字、ちよつと起きとくれ〜」

音量があるでもないのに良く通る声に名を呼ばれ、枕元の目覚まし時計を見れば午前9時。深夜2時に仕事を終えて帰宅した彼とすれば、休日の今日くらい後1〜2時間は睡眠に費やしたい所であるのだが

「竜の字〜、竜兵〜！起きとくれつてば〜、チヨロ松達を向かわせるよ〜？」

声の主は彼を寝かしておくつもりはないようだ。このまま寝てれば本当に丁稚の六ツ子達に布団ごと移動させられる自分が容易に想像出来てしまう。

しかもなぜか見事に簀巻きの状態でだ。そうなつてしまえば例え無理難題を吹っ

掛けられても拒否権は発生しないだろう事が容易に想像出来た彼は、ならば自発的に『彼女』の元へ行つたほうが精神衛生的にも良いだろうと判断し、布団から起き上がり怒鳴り声を上げる。

「ああつうるせえ！今行くから待つてろ!!」

普段の彼にしてみれば少々乱暴な物言いだ、彼女ならば気にも留めないだろうと自己完結しつつ右目に眼帯を巻き付け、背中まで伸びる後ろ髪を軽く3つ編みに結わえ、寝巻きの裾と帯を整えながら、まだ惰眠を貪ろうとする頭の中をゲンコツで切り替え居間へと向かう。

「お早っさんっつーか美津里さんよ、俺仕事で徹夜明けなんだけどもう少し寝かしてくれねえかな?」

ガラッと乱暴に襖を開け、朝の挨拶・兼抗議の声を居間の中央にあるちゃぶ台でキセルを啜えて一服入れている女性へと投げ掛ける。

当然不機嫌そうなジト目もセットである。

「おはよう竜兵、今日もいい天気だねえ」

そんな彼を気にもせず陽気な声で返事を返すのは、腰までまつすぐに伸ばした艶やかな鳥の濡れ羽よりも尚黒い黒髪。一直線に切りそろえた前髪の下丸眼鏡の奥には、

見るを者を引き付けて止まない妖しい魅力を湛えた濃紫の瞳。

浅葱色の小袖を粋に着こなして緑茶をすすする、パツと見少女にも妙齡にも見える年齢不詳の美女であり、彼の保護者にして雇い主・居候先であるこの店、『骨董・眩桃館』の主「麻倉 美津里」その人である。

ちなみに青年の名は現在この眩桃館で美津里とともに住んでいる「長谷川 竜兵」25歳。場合によってはエドワード・ロング、飛・烏龍（フェイ・ウーロン）などとその場の思いつきで偽名を名乗る、眩燈館唯一人の従業員であり雑用兼荒事要員である。居候の肩身は狭く、今朝も今朝とて保護者との円滑なコミュニケーションを図るべく、こうして呼び出しに応じているわけだが……。

「竜兵や、お前さん学生になってみんかね？」

「……はあ？」

湯飲みを両の手で弄びつつトンでもない事を言ってきた美津里の言葉に、竜兵は思わず間の抜けた声を上げてしまう。いや、世間一般からしてみれば幼少の頃から進学せず、得体の知れない骨董品店で朝に夕にと働く彼は確かに珍しいケースと言えるだろう。

しかしコレが10年ほど昔の話だったなら、仮にも保護者を名乗っている彼女とすれば進学の一つも勧めてみようと思う親心が働いたと採れるだろう……が、流石に幾らなんでも25（この歳）になってから、何を寝ぼけてやがる？　と思うのは当然の帰結と言えよう。

そもそも父親が蒸発した彼を引きとったその日から、彼は彼女より大学卒業レベルまでの学問を叩き込まれた上に、医学薬学に始まり拳句の果てには何やら怪しい『専門知識』の手ほどきまで受けているわけで、それが今更学生などと、怪しい事この上ない。いや、どう考えても厄介事に違いないと竜兵が勘繰ったのは誰に責められる事でもない筈だ。

ともかく、それ相応の知識・教養を身につけてる彼に今更学生をしろというからには、おそらく『仕事』……それも彼女の趣味の側面が強いそれに違いない。

（うゝむ、趣味だと退かないからなあこの女性（ひと）。 簀巻きで連れてこられようが自分で歩いてこようが、元から選択肢は無かったって訳かあ。 くそう、もうちよつと寝ておきや良かった）

などと益体も無い事を考えながら美津里の淹れた日本茶（出涸らし）を飲みつつ思考を纏めた竜兵は無駄な抵抗をあきらめ、ため息を吐きつつ美津里に承諾の意を伝えた。

「ああつ、気は乗らねえが仕事なら仕方ねえ。　んで俺あ何処の大学に潜り込みや良いんだよ？」

結局何だかんだ言っても彼女の依頼を断れない自分の甘さにイライラしつつ、ちやぶ台をはさんで彼女に向かい座って尋ねた童兵に、美津里は切れ長の目を細め、それはそれはうれしそうに笑いかけた。

「いやいや、大学じゃないってば」

「はあ？」

「高校、英語で言うならHigh Schoolだあね」

「おいババア、とうとう脳軟化でボケが始まつつはあつ!!!」

そこまで言いかけた童兵は、突如ちやぶ台の影から現れた成人男性の胴回りほどある灰白色の巨大な腕に殴り飛ばされて宙を舞う。

「おやおや、こんなうら若き乙女に対してババア呼ばわりなんて。　躰が成つてないね、親父の顔が見てみたいモンだよ」

「ぐつつ、育ての親は間違いなくテメエじゃねえか！」

「……数世紀生きると物忘れが激しくてねえ」

「都合の良い所だけ年寄り面すんじゃないやねえ、この妖怪が!!」

「あらやだね、そこは魔女って呼んでおくれよ」

プンスカと音が聞こえてきそうな分かりやすい怒り方をして頬を膨らませる美津里に対して、殴り飛ばされた時に後ろの柱で勢い良くぶつけたのか、頭から血を流して抗議する竜兵。殴られた際に舌を噛んだのか口を押さえる指の隙間から血がダクダクと流れ落ちる辺り、彼女に対して年齢の（一線を越えた）突っ込みは、彼をしても命懸けであるようだ。

「ともかく高校生なんぞこのナリで出来るわけねえだろ！ 引くわっ、って言うか怖いわー！」

「まあ、確かにお前さんがそのまま学ラン羽織った姿はコスプレじゃすまないねえ」

「だろ?」

「私が警官なら、先ず撃ち殺してから現状を把握したくなるくらい嫌な絵面が浮かんだよ」

「自分で振っておいてソコまで言う!?!」

「とまあ冗談はさておき、高校へ学生として入れているのは本気なんだよ」

「だから……、ぐっ!」

2 m近い20代半ばの男が高校生をやることの不条理さをさらに説こうとする竜兵は、不意の眩暈を覚え畳の床に手を突く。

「おやおや、竜兵どうしたんだね？」

「ぐつくぐつくつ、美津里つ、手前え一体何盛りやがった!?」

「いや、さつき淹れた茶にちよつと……つと、どうやら効果が出てきたようだね？」

貧血にも似た脱力感に全身を苛まれる竜兵を見る美津里の口が、ニイイツと釣りあがり笑みの形を作り出す一方、竜兵の体に変化が現れ始める。

ぐき、めき、メメタアアアツ!

おおよそ人の体から鳴ったら危険信号をブッチギリ突破という、なにやら生々しい音を響かせつつ彼の体が徐々に縮み始める。

「うおおつ、痛えっ! これおまつ、ちよつ! 死ぬ死ぬ死ぬつ、洒落にならんどこれはっ!」

「いや、久しぶりに作ったから人体実験もしてないんだけど上手く効いてる様だね、その『若返り薬』」

「いぎぎぎつ、骨がつ、肉がつ、内臓が!!」

「んふふふふ、一気に10年若返るんだから多少痛いのは我慢しときなよ♪ コレで薄らデカイお前さんも待望の『シヨタ化』で……」

って、あれ？」

何やら聞き捨てならない単語をニヤニヤと口走りつつ竜兵の変化を見守る美津里の

眉間に皺が寄る。

「シヨタなら小学生だろうがつつてぐぐぐつ、……っふーくくつっ!」

「……あれ? 何か縮小率が中途半端な気がするんだけどねえ?」

薬の効果時間が終了したのでだろう、今のちやぶ台の前には肩で苦しげに息をする竜兵と、首をかして頭上に?マークを浮かべる美津里の姿。

果たして結果通りに若返りと言う、未だ人類の医学力では到達し得ない神秘は成った。

……しかし

「何か縮み方……少くないかい?」

「……っざっけんなよ? 手前え10年前の俺の身長知ってるだろうが!!」

美津里の目の前で苦しげに息をする竜兵の姿は確かに若返っている、具体的に言うなら幾分肌がツヤツヤに、198cmあった身長は189cmに、鍛え上げられた筋肉は微妙にスリムになったか……な? 程度に効果があった。

「おい、仮にも息子に得体の知れない薬を飲ませたんだ。 仕事の話の前に何か言うこと無いのかよ!」

美津里の目の前で不満たらたら表情を浮かべ、抗議の声を上げる竜兵。

「そうだったね、……竜兵」

「んだよ」

「お前さん……、15の頃からそんなに薄らデカかったんだね」

「先ず第一声がソレ!?!」

思わず突つ込む竜兵を余所に、美津里は彼に縦横5cmくらいのジュエリーケースと思しき箱をちやぶ台の上にコトリと置いた。

「これは?」

「ん、私からの入学祝いかな?ちよつと付けてみておくれよ」

付けてみるということは箱の大きさからしてピアスカリングの類、彼女からのプレゼントと言ふ単語に過去の経験から一抹の不安を憶えつつも蓋を開ける。

箱の中には薄い赤味の掛かった羽を模した金属のスタッドピアス。

うほつ、いいピアス! ピアスのほうも心なし「つ・け・な・い・か?」と彼にささやいているような気がしないでもない。

「付けてみて良いかな?」

「んふふふ、良いよ良いよ、私の手製さ。遠慮せずに付けとくれよ」

彼は後にこう語った。

「後から思えば『彼女の手製』って所で一旦考えてみればよかつたんだ」と。

取り敢えず手に取ろうと竜兵の指が触れたその瞬間、体に電流が走ったかのような衝

撃と共に、彼の頭の中に流れ込む莫大な知識の奔流。

数秒後にピアスから指を離れた竜兵は、荒い息と共にイヤな予感をヒシヒシと感じながら美津里に訊ねた。

「美津里姐さんや？ まさか、とは思うけど、俺の入学先つてのは……」

「んふ♪ ご名答『IS学園』だねえ」

有り金全て詰まった財布を落とすよりもショックを受けた彼の目の前のTVには10時のワイドショー番組。 ニュースキャスターが若干焦り気味に今日のトップニュースを読み上げていた。

「緊急速報です！ 先日引き続き二人目の男子IS適合者が政府によって発表されました！」

この日不思議の世界の住人が、IS学園と言うもう一つの不思議の世界に紛れ込む事になった。

IS学園前にて

国立IS学園

アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。まあ操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。この学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約があり、それ故に他国のISとの比較や新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。ただしこの規約は半ば有名無実化しており、全く干渉されない訳ではないというのが実情である。

「以上、麻倉美津里編集『猿でも分かるIS関連用語集〜天の巻〜』より抜粋IS学園の説明です た、まる……つと」

なぜか気がつけば一人ポツネンとIS学園の前にいる俺の名前は長谷川竜兵。あの日から気がつけば美津里主導の下あれよあれよと言う間に入学準備が進行し、こうして本日今更ながらIS適正値測定及びデータ取りをするためにIS学園に2日早く入学という運びになったわけだ。

しかし今更ながらなぜこんな事に……。いやそれ以前に何で美津里がI S コアをまるっとI つ所持してる事を疑問に思うべきか？ 多分俺が起動できたのも彼女がコアに細工したつてのは容易に想像がつくんだが。

……うん、あの女(ひと)の出鱈目はいつものことだ、深く考えるのはやめておこう。I S、正式名称「インフィニット・ストラトス」宇宙空間での活動を想定し開発されたマルチフォーム・スーツ。あの基礎理論は非常識の代名詞とも言える各種技術・知識を修めてる俺たちのような人間からしても、まるで『魔法のような』シロモノだった。それを独力で発明した提案者である篠ノ之束博士つてのは間違い無く『こっち側』の素質があるんだろうさ。

仕事の関係でもこいつを身に纏った姉ちゃん達に追い回されたことが何度かあった。うん、最後に大立ち回りをしたのはドイツだったか。誘拐犯をとっちめたらI S 纏った小娘に襲われて、やつとこさ追い払ったら壁を突き破って般若もかくやと言う形相のブリュンヒルデ(世界最強)に危うく突き殺されそうになるとか……無いわあ。

鬼女の知り合いが居ないわけでも無えが、人の身で鬼より怖いってどうなんだろうな？

などと血生臭くも懐かしい思い出に浸っていると

「本日より入学、長谷川竜兵だな？ ……ブツ！ククク。いや、まさか本人だとはな」

背後よりずいぶんとドスの効いた女性の声とともに、俺の首筋には馬鹿でかい刃物が突きつけられた。……これ I S の近接用ブレードか？

恐る恐る後ろを振り向くと、そこには……、

「久しぶりだなエドワード・ロング、いやスクリーミング・クロウと呼んだ方がしつくりくるか。それにしても、ククク。随分と縮んだものだな？」

……そこには、イイ笑みを浮かべつつ絶対零度の殺気を纏う『鬼』がいた。

「げえっ！ ぶ、ブリュンヒルデ……いや織斑千冬（世界最凶） 何でお前がここに居る!?」

「クツクツクツク、ここは天下の I S 学園だぞ？ 教師の中に元ブリュンヒルデ（世界最強）が居てもおかしくはあるまい。……あと学校では織斑先生と呼べ」

「みつ、美津里いいいっ！ 知ってて黙ってやがったなアイツっ！」

にいいいいいっ、つと獐猛な笑みを浮かべて俺の背後から刀を突きつけてくる、この黒スーツ姿のクール・ビューティーの名前は織斑千冬。 I S の黎明期から I S に携わり続け、その国際大会「モンド・グロツソ」において総合部門優勝、世界最強の称号「ブリュンヒルデ」の名を恣（ほしいまま）にした、いわゆる超有名人である。

知り合ったのは5年前、当時成り行きでエドワード・ロングの偽名を名乗っていた俺はドイツで仕事に関わりを持つことになったんだが、ぶっちゃけ貧乏くじを全部引か

せた上に面倒事を丸投げして逃げてきたという大きな借りがあり……うん、つまり今、入学直前にして俺の命は風前の灯、グッバイ・マイライフ。

頭の中で走馬灯のエンドロールが流れ出し、脳内銀幕にホラー映画よろしく血文字の「f i n」が俺の悲鳴と一緒にデデーンと浮かび上がるのを覚悟したその瞬間、千冬のさらに背後から俺ではない誰かの悲鳴が上がる。

「お、織斑先生先に行っちゃうなんて酷いですよ……って、キヤアアアアッ！ 何やってるんです か!？」

「む、山田君か。……ちつ、命拾いしたな？ おいエド、この件は後でじっくりと話しそうじ やないか」

俺の首横、頸動脈の上に置かれた刃がスツつとどけられる。 いや助かった、世界で2番目の男性適合者、入学前に打ち首で死亡とか正直許してほしい。

無事だった首筋を手でさすりながら後ろを振り向くと、馬鹿でかい刀を軽々と肩に担いだ千冬の隣で黄色いワンピースを着た……おそらく学園の教師と思しき女性が息を切らせながら抗議をしている。

ふむ、見た目の幼さに反して中々のバストを持ってらっしゃるようで、肩で息をする

たびにたゆんたゆんと双丘が……おっと、千冬に睨まれた。

「ハアハア、どうしたんですか今朝から何もしやべらないと思つたら、いきなり打鉄のブレード担いで飛び出してつちやうし」

「あく、すまん。昔の知り合いに会えると思つたらつい『はしやいで』しまつてな」

山田と呼ばれた先生へ申し訳なさそうに頭をかきながら返答しつつ、千冬はこちらをギニヨリと睨み

「それに入學してしまえば『国際的犯罪者』だろうと3年間は手出しできなくなつてしまふ。ならばこの場で首の一つも刎ねてしまつたほうが世の為人の為と思つて……なああ?」

「へえ? ふえええええつ!」

おーい千冬さんや、殺気をバンバン飛ばしながら人のこと犯罪者扱いはやめてくれ。

あと首刎ねるつて、お前一体いつの時代の人間なんだよ、さすが日本を代表する最後の首刈り族『SAMURAI』漏れ出た殺気で山田先生の顔色がすごいことになつてんぞ?」

「ふん、まあいい。何かあれば私が直々に引導を渡すし、お前のその風体の理由についても後で聞いてやるからさつさと適正試験を受けてしまえ」

ああ、そういえば適正試験を受けに来たのをすっかり忘れてたけど試験つて何をやる

んだ？ 一応事前に I S の知識程度なら仕込んできたが、操縦方法なんて端から斜め読みしかして無えし、うゝむ、一応聞いてみるか。

「なあちふ「織斑先生だ」……先生、試験やデータ取りって何やんだ？」

「敬語を……まあ良い、山田君説明してやってくれ」

「あ、はい。 ええとですね、これから長谷川君には I S を展開後いくつかの基本機動を行ってもらった後に模擬戦をしてもらう事になります」

「え？ 模擬戦に負けたら入学取り消しかい……ですか？」

「いえいえ、別に上手に動かす必要はありませんよ。 長谷川君に動かしてもらうことによつて I S と長谷川君の相性……つまり適正 値をはじき出すだけですから」

「んむ、了解」

まあ要はぶつつけ本番、試験の結果は置いておいても入学は確定つて訳か。 取り敢えずは気楽に受けれるつてもんだよな。 気楽に……ん？ 何か引つかかる。

俺、何か大事な事を見落として無えか？ 山田先生の説明を受けながら、何か心の片隅に引つかかるものを感じながらも俺たち 3 人は試験会場と思われる建物の中に歩を進めていった。

アリーナにて

―第4アリーナ―

試験会場に到着した俺はアリーナ上空の空を眺めている。本日は晴天なり、ただ所によつては墜落したISが降るでしょうなどと益体も無いことを考えながらボケーつと指示が出るのを待っている。

むう、まだ待たされるのかね、煙草吸つたら拙いわなあ……でも吸うか。一瞬の逡巡の後胸ポケットに手を伸ばしたその時

「長谷川君、お待たせしました。それではISのデータ取りをしますのでISを展開してください」

管制室から山田先生のアナウンスが場内に響いた。

さて、本来であれば世に出ているさまざまなISのデータと言うものはアラスカ条約の規定によりデータの開示が義務付けられているので、各機体のスペックは表向きの情報程度であればどの専門機関にも知れ渡っているのでわざわざデータを取り直す必要は無い。

もちろん専用機などという特別なISであっても各国家、各企業によつてデータを収

集され、事前にI S学園へ送られているのが通例である。

しかし俺の場合、ふざけた事に所属企業が「骨董品店」であり、製作者が「骨董品店の店長」である。完全に機体性能はベールに包まれたまま、つて言うか俺もまだ一度たりともI Sを展開なんざして無えけどさ。

そう言えば俺の事が公になった後、『イロイロな』ヤツラが家に押しかけて来たみたいだ。しかし自慢じゃ無いが我が家は魔女の棲家であるからして、面倒な奴等は何をどうやつても辿り着けない様になっている。害意悪意を持つてる奴等は……、まあ何だ、ご愁傷様デス、骨くらいは残つてりや良いけどな。

ちなみにI S学園（ここ）には公共機関を乗り継いで来たわけだが、当然の事ながら道中四方八方からその筋の方々の素敵な視線を貰つて辟易したもんだ。

まあそりやI Sの解析をするよりも、人間の解剖とDNAの解析の方が楽に決まってるからな、あわよくばチャツチャと攫つてバラしたい気持ちも分かるんだが、もう少し気配の消し方の上手い奴を監視に付けろよ。

もちろん気付かないフリしてスルーしたけど、中には『情熱的』なアプローチを掛けてきてくれた奴等もいたわけで、そう言う人々にはこちらも『熱烈な』歓迎をさせて貰うことになったけどな。

……本当この国ってスパイ天国だわ、良いのか公安!?

そんなこんなで I S 学園としても正式に俺の機体のデータが欲しいと言ったところだろうか、入学前の事前試験となつたわけである。

「おいエド……長谷川、聞いているのか。さっさと展開しろ」

お、物思いに耽りすぎたか。 んじゃ一丁展開してみますかね、何だかんだ言つて俺も男の子、I S に興味が無いって訳じゃ無えんだよ、むしろ興味津々だしな。

左耳のピアスに意識を集中して自身の I S を装着。イメージは鞘から抜き放たれる日本刀。

「……来い、烏天狗（カラステング）!!」

—管制室—

こんにちは、山田真耶です。

本日は世界で二人目の男性 I S 適応者、長谷川竜兵君のデータ収集の日なんですけ

ど、朝から織斑先生がピリピリしてて少し怖いです。

おまけにさっきは「来たか」ってつぶやいたかと思つたら、整備中の訓練機のブレードを担いで学園の外に走り出して行っちゃうし。

あわてて追いかけて行つてみれば織斑先生がうちの制服を着た男の子の首筋にブレードを突きつけて、……って、キャー！何やってるんですか織斑先生！

無事に事なきを得た男の子、彼が長谷川君なんですね。裾を長く伸ばしてコートタイプに改造したＩＳ学園の制服を羽織つた身長は１９０ｃｍ前後、うわつ、足長い！モデルみたいな後姿です！

後ろ髪を三つ編みにしてるけど、あの髪の毛真っ黒でサラサラで、ううつ、仲良くなつたら髪の毛の

毛の手入れ教えてもらいたいなあ……。

……それにしても身長のせいか一見細身に見えるけど、肩とか背中周りとかすごい筋肉！体力有りそうだし、この学校での訓練についてこれないって事はなさそうですね。あの身長でＩＳを纏つたら絵になりそうですね。

あ、織斑先生がブレードをどかしました。ん？二人は知り合いなんでしょうか、

長谷川君も織斑先生もズイブンとフランクに会話してますね。織斑先生、口調はズイブンと不機嫌そうですね、……何かうれしそう？

どういった関係なんでしょうか？

首筋をさすりながらこつちを向いた長谷川君、……三白眼ぎみの目つきがちよつと怖そうだけど整った顔してますね格好イイかもしれません。左目の下の泣き黒子がセクシーです……コホン。

右耳に2連、左耳に3連のピアス、一番下の羽の形をしたピアスが彼の専用機なんだそうですけど、もしかしてちよつと不良さんなのかな？ ダメダメ！ 印象だけで判断しちゃだめだよ私。

きつといい子！……のはず!!

「それに入學してしまえば『国際的犯罪者』だろうと3年間は手出しできなくなってしまう。ならばこの場で首を刎ねてしまったほうが世のため人のためと思って……なあ？」

……いい子だと良いなあ、『国際的犯罪者』ってなんですかあ？ クスン。

でも、彼の容姿で一番印象的なのは右目に掛かるくらい長く垂らした前髪の下にある黒い革製と思しき眼帯です。彼の資料の身体特徴の項に書いてあった右目に障害有りと言うのがアレなんです。ISはハイパーセンサーによって死角と言う物が発生しませんけど、先生が見えますからね、長谷川君頑張りましょう！

と、朝からの出来事を回想してると

「おいエド……長谷川、聞いているのか。 さっさと展開しろ」

織斑先生が長谷川君にISの展開を促しました。 いけないいけない、私もIS学園の教師です、しっかりお仕事がんばらなくちゃ。

長谷川君はこつちにチラッと視線を送ると、足を肩幅に開いた姿勢のまま目を閉じてつぶやきました。

「……来い、烏天狗（カラステング）!!」

—管制室・モニター前—

エドワード・ロング、いやココでは長谷川だったな。 光の粒子が収束し長谷川のISが展開を完了する。

展開速度もまずまず……フン、生意気な。

…それにしても、

「わ……あ」

「ほう、ソレがお前のISか。 らしいな」

二の腕の外側を覆うように展開された腕部装甲は肘から先で細く絞られ、その上を漆黒の手甲が覆う、手甲の先は鋭くとがった爪の様な指装甲。同様に脚半で覆われた括袴（くくりばかま）のような脚部装甲、足袋のような足先にはご丁寧に一本歯の鉄下駄。本来IS用スーツになるはずの本体部分はずか黒の鈴懸（すずかけ）を羽織った着物になっていて。赤と白の組み紐で出来た帯を巻いたソレは……、それはどう見ても洒落と冗談と趣味100%で構築されたIS。

なんと言うか、訓練機ISの「打鉄」に負けず劣らずの和風IS。ありていに言えばその外見は山伏を模した妖怪、世間一般で言うところの「天狗」だった。

数年前、とある事件で知り合ったヤツはあろうことかISも使わずに単独で空を駆け、どこからとも無く取り出す日本刀と、方術と呼ばれる特殊技能を使い素手でISを制圧していた。

その姿をどこかで見た気がしていたが、あのISを見てストンと腑に落ちる、ああ、あの姿の通り、正に『天狗』だ。あのとときの貴様を実に良く現した出で立ちだよ。

モニターにISの初期情報が表示されていく。

コードネーム：「烏天狗（カラステング）」

コアNO：

213

所属： 「骨董・眩燈館」

製作者： 「眩燈館店主・麻倉美津里」

操縦者： 「長谷川竜兵」

状態Ⅱ初期状態： 要フィッティング・パーソナライズ

総エネルギー： 200

(内訳)

稼動エネルギー： 160

シールドエネルギー： 40/40

バス・スロット： 512

イメージ・インターフェイス：停止中

収納武装： 1次移行前につき武装展開アクセスロック中

近接用ブレード×2

信州産・杉丸太×10

??????????

? ……いや、待て。待て待てまでマテ!

武器が近接用ブレード2本のみは分かる、私も現役時代は雪片1本だったし相当な容量の拡張領域を見れば後付武装も十分に収容出来るだろう。

所属が骨董品店だとか店主がIS製作者と言うのも100歩譲って納得しよう。

サブ武装の中に杉の丸太とかも……、いやココから突っ込むべきなのか?

長谷川、お前その丸太は一体何なんだ!? これは私が突っ込んだら負けとかそう言う類の物なのか!? 間違いなく突っ込んだら負けな気がするのは私だけなのだろうか?

そして何よりも目を引くのがシールドエネルギーが40と言うその表示だ。隣を見ると山田君がぼかんとした顔で表示された機体情報を見ている。

それはそうだろう、ISの操縦者を守るシールドのエネルギーは第2・第3世代機であれば800前後、IS黎明期の第1世代機であっても500前後はある。40と言うシールド値は言うなれば障子紙程度の障壁にすらならない。中口径以上の弾丸やレーザー1発で敗北が確定するだろう。……仮にあのエネルギー総量の少なさが構造的欠陥でないとするならばだ、その圧倒的不利を覆すのに一体何があるというのだ? まあいいだろう、全ての疑問はこの試験中にある程度判明することだ。

「久しぶりに見せて貰うぞ長谷川竜兵、かつてスクリーミング・クロウと呼ばれたお前の実力を」

—再びアリーナ—

烏天狗を纏った俺は管制室からの指示に従い、歩行・走行・飛行を行う。初めの歩行の時に軽く躓きかけた意外は自分でも驚くほどスムーズに行動が可能となった。

要はこのISと言う物、力とイメージのバランス取りがキモってこった。四肢の駆動はパワーアシスト、飛行や姿勢制御をイメージで行うって訳だ。

んで繰り返すうちにAIが搭乗者の動きを記憶し、クセをパワーアシストに反映させる事によって最終的に搭乗者にとって最適の動きが最大値かつ最速で出来るようになるって寸法だ。

軽く手足を動かしてみる。現在のトレース率70%って所か、多少腕の振りが重かったり逆に引つ張られるし、飛行時の姿勢制御もイメージより30cm前後ズレが見られる。

1次移行も終わってなけりや仕方ないと言う気もするけど、オートのフィッティングとパーソナライズってこんなに時間が掛かるもんなのか？ かつたりい、めんどくせえ、と言っても今更どうなるわけでもなし……はあ。

飛行の方は『自分で』飛ぶ事を思えば遥かにニブい。まさか本気で飛ぶわけにも行かないし、そこら辺は折り合いをつけるしかないか。それにしても、さつきからコイツを動かして一つ二つ気がついたことがある。

俺の勘が正しければこの機体は相当なじやじや馬つて事になるが……、ちよつと試してみるか？

飛行中にハイパーセンサーで管制室の様子をチラ見する。キーボードを叩きながらモニターを見ている山田先生の隣で千冬がこつちを見てやがる。ん？ 何か言ってるな、唇を読んでみると

「ホンキヲダスノハスコシマテ ソレトオリムラセンセイダ」

なぜに考えが読めるんだよ。

そんなこんなで基本動作のデータ取りが終了。 気になる適正值の方は『B』だった、……別にかつかりなんざしてねえぞ？

これだけ動かせれば『A+』くらいとか浮かれてなんて、……畜生。

アリーナにて2

「なんだこのISは!？」

「へっ? 織斑先生どうしちゃったんですか?」

管制室でモニターを見ながらキーボードを打ち込み続ける真耶は千冬のつぶやきの意味を判じかね訊ねた。真耶の問いかけに、千冬は手にしていたクリップボードでデータの羅列が並ぶモニターの一点を隠し彼女に質問をする。

「長谷川がデータ収集を始めて40分が経過したな」

「ええ、そうですね」

「さて、ココで質問だ。ヤツのISのエネルギー、どのくらい消費したと思う?」

「へ?」

突然の質問に真耶はココまで竜兵が行った行動と機動の精度を思い返し、頭の中で烏天狗のエネルギー消費量をはじき出す。

竜兵の見せた機動はお世辞にも上手とは言えないものであった。データを見る限りでは本人の熟練度と言うよりも1次移行を果たしていない烏天狗の情報処理が彼の動きに着いて行けない所が大きいといえるのだが、元代表候補生にして国家代表を凌ぐ

とまで言われた真耶の目からすれば荒削りも良いところである。

要するに無駄が多い分エネルギーの消費も大きいわけで、彼女は千冬の問いに元よりエネルギーの少ない竜兵のISがエネルギー切れであると結論付ける。

「あ、エネルギーチャージの指示を出さなくちゃですね、あれ？ 何でまだ……動いてるの!？」

「では答えあわせと行こう」

竜兵に向かってエネルギーチャージの支持を出そうとする真耶を手で制し、千冬はモニターを隠して

いたクリップボードをどける。

「え?」

そこには試験開始時よりほんの数パーセントしか減少していない烏天狗の総エネルギー表示。

「そんな……、まさか!」

「私も驚いたがな、どうやらあのISの特性の一つらしいな」

「……エネルギー効率重視型もしくはエネルギー増幅型!? それも桁違いの高効率……ですね」

「ああそうだ、しかもこれはあの機体の特性の一つに過ぎないだろう……、おそらくな」

エネルギーが減らないのか、減っていく先から増えていくのか、おそらく前者であると確信しつつ千冬は普段の彼女が見せることは無い、イタズラが成功した子供のようにニヤリと笑ってつぶやいた。

「いずれにせよ次の模擬戦で分かるだろうな。クツクク長谷川、模擬戦の相手は少々ハードだぞ?」

「織斑先生……、な、何か笑いが黒いですよう、あうううつ」

—アリーナ—

適正値Bの報告に、非常に非つ常に複雑な思いを抱いている俺へ、制室から指示が入る。

「長谷川、これから模擬戦だ。お前には学園の教員と模擬戦を行ってもらおう」

「いや、ちよつと待ってくれ。この機体ってまだ1次移行してないんだぞ? 動きが

鈍くって仕方ねえ

んだから、少し待ってくれよ」

「却下だ、私がやれと言ってるんだ。 答えは「はい」か「YES」のみと知れ」

「……Ja (ヤー)」

いや、どこの独裁者だよ。まさかこの学園の教師はこんなものばつかじやねえだろうな!?

あまりと言えばあまりの物言いにドン引きしている俺を無視して千冬は続ける。

「ああ、それと待たせたな。これより先お前の好きにやっつけていいぞ」

「むう?」

つまり今のセリフを要約すると……、腕が落ちていないか見せてみろって事か、そこまで言われたなら……、少しくらいは良い所を見せてやろうかね?

そんな事を考えつつ、俺は管制室の千冬に了承の意を示す。

「大いに了解だ、んで相手は誰だ? あんたが相手してくれるってかよ?」

「クッククック、残念ながら今回は遠慮しておくさ。実は熱烈な希望があつてな、お前の

相手はソイツに一任してある」

「ぬう?」

……まずい、何か嫌な予感がするっ! ココに来る前にも感じたさっきの違和感、あの千冬が俺と

の戦闘を辞しても見たいと思わせる相手がいるだど? 腕の確認以前に俺が慌てふ

ためく様を千冬が見たかつたとしたら? うっわくナンだろう、嫌な予感がヒシヒシと

してくるっ。

間違いない、これは模擬戦と言う名の公開処刑に他ならないんじゃないのか!?

そんな内心冷や汗ダラダラな俺の前に1騎のISが姿を現した。機体は俺の記憶が確かならアメリカ製第2世代IS「ファルコンII」

機体そのものにちよいとした逸話がある、ある意味レアなISではあるがそれ自体は取り立ててどうと言うことは無いんだが、問題はあのISの腰周り。

本来量子変換による武器の呼び出しが主流であるはずのISに、これ見よがしに巻かれた革製のガンホルダー。

西部劇のガンマン宜しく左右に2つぶら下げられた2丁のゴツついりボルバーは……。

あゝ、やつぱり。あの拳銃『サンダラー』じゃねえか……、いやな予感的中だ。

「よう2代目、久しぶりじゃないか。少しの間だけど楽しんでいきな!」

ISからオープンチャンネルを使わず直に声をかけてきたのは、ボリユームのあるブルンドの髪をバレッタで後頭部に纏めたグラマラスな美女。

ああ、よく知ってるわこの女性(ヒト)。まさかこんな所で教師やってたのかよ!

「なんでアンタがここに居るんだミシエル・マーティガン!」

「いやゝ千冬の勧めでさ、ちなみに君のの担任になるからヨロシクねえ」

「なんの冗談（いやがらせ）だ千冬!!」

「担任が私と言う話もあったのだが？」

「……いえ、前言撤回させていただきます」

軽い頭痛を覚えながらも俺は視線をを目の前に浮かぶISに移した。

ファルコンIIは高速かつ高火力をコンセプトにアメリカが開発した二世代機の先駆けのはずだったが、余りにピーキーな操作性のため機体制御がべらぼうに難しく、火器を展開してからの戦闘で相手にクラッシュする事故が相次ぎ、「この機体の真の武器は体当たりだなH A H A H A!」 「バーボンガブ飲みしたあと目隠ししたままロデオした方がまだ安全だZ E!」などと揶揄された挙句、開発後わずか1年でお蔵入りとなったアメリカらしい欠陥機のはず。

まだ現存してたことにも驚きだが、乗り手が存在してたんかい。

なにはともあれ、こんな馬鹿げた機体を相手にするならせめて1次移行（ファーストシフト）せにや

話にならねえ。 試合開始から逃げに徹して時間を稼ぐか？ あのミシエルを相手に？

彼女の名前はミシエル・マーデイガン。 旧姓ミシエル・ミルストンと言い、苗字は母方の姓を名乗ってたらしいが問題は彼女の父親の方だ。 俺も小さい頃に会ったこ

とがあるが、小柄ながら筋肉の塊に覆われた体軀に顔面イレズミのモヒカンジジイ。

自分の身長ほどあるトマホークを片手で軽々と振り回すパワフルなジジイなんだが、特筆すべきはもう1つの特技、1つの銃声で6発の弾丸を打ち出すその拳銃捌きだ。

凄腕ガンマンだったジジイの名前はボニー・ウイリアム……、つまり……。

「それじゃチョイと踊っておくれ。行くよ竜兵（エドワード）ー！」

「はっ、来やがれ『ベリー・ザ・キッド・2世（セカンド）』!!」

アリーナに試合開始のブザーが鳴り響き、2機のISが空を舞った。

「あのお織斑先生？」

「ん？」

「良いんですか長谷川君の機体、1次移行してないんですけど？」

「ああ、そんなことか」

「そんな事って……」

「クツクツク、アイツが慌てふためく様が見れば問題ない！」

「ガクガクブルブルっ、（今日の織斑先生、本当に黒いですようっ!!）」

片隅にて（反省中）

—アリーナの片隅—

「でもさあ、やっぱり理不尽だと思おうわけよ」

「ん、どうしたジュニア？」

「ジュニアはやめれって、いや、こっちは出せる機体性能フルに使って奮闘したわけだろ？」

「ふむふむ、確かに1次移行もしてない機体で良くぞアタシの猛攻を凌いだね。で？」

「褒められこそすれ、コノ扱いは無いんじゃないかねえかなって」

「あははは、まあ細かいこと気にすんなって。悩みすぎると禿げちゃうぞ♪」

「……ほお貴様ら、私の説教の最中にズイブンと楽しそうじゃないか？」

「「あ」」

ゴシヤ！

明らかに人体を殴打したときに出てはいけけない圧壊音がアリーナに響き渡る。現在アリーナのピット前では童兵とミシエル教諭が正座させられ、織斑千冬の説教を受けている真つ最中である。

正座をする二人の腿の上には拷問よろしく一抱え近いコンクリートブロックが乗せられている。

「まったく、本気を出していいと言ったが、たかが模擬戦でアリーナを崩壊させるつもりか貴様らはっ！」

「あはは、ごめんね〜千冬♪」

「あはは、ごめんね〜千冬♪」

ゴパン！

「いつ痛〜つ、ゴメンてば！ ホント反省してます！」

「うおお、のっ脳みそが崩れるっ！脳がクラツシユタイプのこんにやくゼリーにつっ！」

「ふう、……まったく始業式前で近くに生徒がいなかったから良かったものの」

見上げればアリーナの天井部分、本来ならば屋根があるべき場所が何かに抉り取られたようにポツカリと幾つもの大穴を空け、その反対側の屋根の一部分は薄く幅の広い穴が無数に空き、中に通っている特殊合金の鉄骨ごと賽の目に切断している。

— 40分前 —

マシンガン、アサルトライフル、ショットガン、ハンドカノンと目まぐるしく武器を

切り替え、高速機動による単機での立体十字砲火を形成するミシエルの猛攻にシールドを削られつつも、最低限のブーストのみで回避する竜兵の姿があった。

1次移行前という制限が掛かり武器を呼び出せず、数メートル単位でしかダッシュが掛けられない竜兵はギリギリの見切りをもつての回避しか許されず、正しくその絵面は絶賛煽り殺し中の様相を呈している。

一方のミシエルも、被弾しつつも一向にシールドエネルギーが減る気配を見せない烏天狗と竜兵に苛立ちが隠せない。しかもラピッドスイッチのタイミングがコンマ1秒でも遅れた瞬間に、竜兵は足装甲と、明らかに打撃目的で装着されてる手甲部で打撃戦を仕掛けてくるので手も抜けない。

しかしながら試合そのものは高水準の空中機動戦であり銃撃戦であり近接戦であった。

ちなみにこの間、管制室で織斑千尋は普段見せない満面の笑みで試合を観戦しているが、背後に湧き出たドス黒いオーラによって真耶が涙目で震え上がっていたのは完全に余談である。

13度目の竜兵の打撃。

左肘打ちを囷にした竜兵の右貫き手を、アサルトライフルで受け止めたミシエルはハイルイトの消えた目でポツリとつぶやく。本来この女性、さほど気が長い方ではない

のである。

「……ああ鬱陶しい。 いい加減消し飛べ」

フルスイングのアサルトライフルで烏天狗を殴り飛ばす暴挙に出ると、腰に差ししていた二挺の大型

リボルバーを引き抜く。

「げっ、そいつ使うのかよっ！」

「むっ！いかん!!」

竜兵と千冬が顔を青ざめさせた拳銃の名前は「ザ・サンダー・レプリカ」 IS用にグリップのみ大型化されてはいるが、れっきとした対人武装である。 と、言うよりも対人武装でありながら明らかに異様な大きさを誇るその銃身が何を物語るのか？

彼女の父親がかつて持っていたオリジナルのサンダーの基本コンセプトはこうである。

“ 多少的が外れようとも一撃必殺 ”

なればレプリカと言えどそのコンセプトに差異は無く。

管制室の強化ガラスにヒビを入れるほどの轟音が響き渡る。

オリジナルの「オリハルコン製」オリジナルをコピーしたIS装甲用の特殊鋼で鍛造されたシリンドー内に込められた、HMX (High Melting point

Explosive)の増薬弾(マグナム)が火を噴き、その莫大な運動エネルギーを得た人外の魔弾が轟音と共に射出される。

直径1・5cm、ISにとっては豆鉄砲程度のはずの弾頭はその運動エネルギーによつて周囲2m程に防御不可能の衝撃波という名のメタルジャケットを纏う。

結果

「ぐっ、うおおおおおっ！」

紙一重で衝撃波ごと避けたはずの竜兵は、弾丸が巻き込んだ空気に弾き飛ばされてアリーナ天井に激突する。

「はっ、よくかわしたと言いたいが……トドメだよ！」

左右のサンダラーを構えたミシエルから銃声が1発、されど神速のクイツクドロウによる弾丸は左右

から3発づつ発射される。高速機動からの防御不可攻撃、これが彼女ミシエル・マーデイガンの真骨頂。

かつて第2回モンドグロツソ決勝まで進出し、決勝で棄権した織斑千冬による不戦勝を善しとせず、自身も決勝を辞退した「世界で一番戦女神(ブリュンヒルデ)に近い戦乙女(ヴァルキリー)」と言われた女性の實力の一旦である。

……まあ既婚者かつ子持ちで乙女つてのも如何な物かって世論はここでは割愛する。

誰だつて命は惜しいのです。

烏天狗が叩き付けられたアリーナ天井に6つの大穴が穿たれ、舞い上がる爆炎と粉塵。滞空しながらホルスターにサンダーを納めるファルコンⅡ。

「ん、ちよつとオーバークルだったかな♪ ……ん？」

粉塵が風に飛ばされ視界の晴れてきたアリーナ天井を見下ろし勝利を確信したミシエルの眉間に

皺が寄る。

そこには屋根に突き立ったボロボロの日本刀に引つかかった烏天狗の腕部装甲と、柄部分に貼り付けられた小さな紙製の人型Ⅱ知る人が見れば身代わりの符Ⅱが一つ。

「むっ、ヤツバい……！」

とつさに身の危険を感じて飛びのいたその空間に殺到する十数本の銀閃は向かい側の屋根を易々と突き抜けて観客席を防護するシールドに衝突して碎け散る。碎け散った破片から、刀身と推測される銀閃の出所に視線を移すミシエル。

そこには

「やってくれるじゃねえかミシエル。よおしく分かった、ココからはガチだ……」

所々ヒビの入った装甲を纏った竜兵が獰猛な笑みを浮かべていた。

その隻眼の瞳は獣のように縦に裂け、怒りを孕んだ殺気によって周囲の気は紫電を

帯びながら渦巻き始める。

ミシエル同様、元来この男も気が長い方ではないのである。

「ははは、本気にさせちまったかい？　ならこつちもガチで行かないとか、……前もつて言つとくけど怪我させたらごめんよ？」

獯猛な笑みを浮かべ、銃弾を再装填したサンダラーを構えなおすミシエル。紫電を纏いながら前傾の姿勢をとり、無手で居合いの構え取る竜兵。

両者の殺気が頂点に達し、刹那の後に解き放たれようとしたその瞬間。

『やめんかあつー、このボンクラ共がっ!!!』

鬼（おりむらちふゆ）の咆哮がアリーナに響き渡った。

— 時間は進み —

「で」

「今に至る・と」

「やかましー！」

すばはばあん！

片隅にて（ファーストシフト）

頭を抱え痛みにも悶える童兵とミシエルを睨み、千冬はこの日一番のため息をついた。

「まったくミシエル、模擬戦でサンダラーを抜いていいなんて誰が言った？」

「ううう、まったくもって申し訳無い」

「まあ、気持ちは分らないでもないが施設に損害を出すなんて持つての他だぞ」

「おい待て、俺への被害は良いのかよ！」

「やかましい」

ゲシッ！

「ぬおああああつ!!」

抗議の声を上げる彼に対し、ヒザ上のコンクリートブロックを踏みつけて黙らせる千冬に絶叫を持つて答える童兵。

折りたたまれた足からポキポキと嫌な音が聞こえるが、まるつと無視して彼女は質問を投げ掛ける。

「にしてもだ、ここまで戦闘を行ってまだ1次移行せんのかお前のISは？」

「ぐぬぬぬっ、ヒザがっ！ 韌帯がブチブチと嫌な音をつ！」

「わ・た・し・は質問してるのだぞ？」

ズンツ！

ぷちぷちごりごりめきめき

「くっつ！ つと俺も不思議に思ってたんだけど、そこんトコロどうなんだ？」

痛みを堪えて質問に答える童兵にふむ、と頷きしばらく思索した千冬は

「確かに気になるな。 お前のISのチェックコンソールを可視状態にして展開してみろ」

何だかんだと言いつつも、そこはIS学園教師。 思いのほか面倒見の良い千冬であつたが、 展開された画面を凝視しながらふとある一点に視線が止まる。

「おい、このメッセージは何だ？」

「ん？」

そこには赤く点滅する「○○ミコマンドでFS」の文字、ご丁寧に隣にはペ○ちゃん顔にデイフォルメされた美津里の似顔絵のアイコンが文字を指差している。

「どうやら展開直後からでも1次移行出来たみたいだな？ これを見る限り……で？」

「FSって First Shift だよな？ 十中八九。 ……で？」

二人のセリフがシンクロする。

「コナ○コマンドって何だ？」

「?????
」

ツツコミ所はどこにあるのか、世代が世代だけに○ナミコマンドを知らない童兵と、生活環境が生活環境だっただけにゲームをしたことが無い千冬に突っ込みを入れるベキか、わざわざこんな小ネタを科学技術の最先端であるISの、よりによつてファーストシフトプログラムに仕込んだ製作者を突っ込むべきなのか、そんなことを思いながら「にしてもコイツら、結構気が合ってるんじゃないのか？」

意外とゲーム好きのミシエルは、仲良く首をかしげている二人を胡乱な目で見つめていた。

十数分後、「タツタラ〜タツタタ〜」という、8ビットの軽快な音楽と共に烏天狗のファーストシフトが完了するのだが、当の本人達が脱力しきつてしまい学園上層部および国際IS委員会には初期のデータをソレっぽくでつち上げて報告することになった。

コードネーム：

「烏天狗（カラステング）」

所属：

「骨董・眩燈館」

製作者：

「眩燈館店主・朝倉美津里」

操縦者：

「長谷川竜兵」

状態：

1次移行状態

各種兵装及び機動制限解除

A装備換装中

総エネルギー：

100／100

シールドエネルギー：

40／40

バス・スロット：

512

イメージ・インターフェイス：

天狗の隠れ蓑（ローブ・オブ・ブラインド）・正常機動中

収納武装：

近接ブレード「子狐丸・改」

エネルギーブレード発生装置

信州産・杉の丸太×10

グランドジャマー射出機

オーロラビーム発振機

と言うファーストシフト後のデータが世に出るのはしばらく先になったのは言うまでも無い。

ソレはそれで後々物語に大きく関わってくるのだが、当の本人達に気付けるはずも無かった。

片隅にて（試験終了）

—アリーナー—

「そ、それではこれで本日のデータ取りを終了しましゅ〜っ」

模擬戦の衝撃で今だ目を回しかけてる真耶のアナウンスと共に、スタッフが機材の片付けを開始

する。 竜兵・ミシエル・千冬の3人を残して周囲は俄かに慌しく動き始めたが、施設修復スタッフは破壊されつくしたアリーナ天井を見上げ、「今日は残業かぁ」と少し涙目だ。

「ふむ、多少のアクシデントもあつたが無事に終了か」

「あゝあははゝ、あれを『無事』で済ましちゃうのね〜」

「ふん、コイツがキレてこの程度の被害なら恩の字だろう？ 詳しいことは言えないが、4年前に

コイツがキレた時にはドイツ軍の基地施設が半壊したんだぞ？ 人的被害はほとんど無かったがな」

「いつ、あれを全部俺のせいにするのか!? 切っ掛けはお前じゃねえかよ」

「知らんなあ? 最終的に私に面倒を押し付けてトンズラした男のせいと言う事で片は付いてるよ」

「ぐきぎきぎき」

何はともあれ面倒な試験は終わったとばかりに3人がそれぞれに肩の力を抜いて、軽い雑談を

している中、ふと思いついたように千冬が口を開く。

「ああそうだ長谷川、国からの通達でな、お前今日から学生寮の方に寝泊りしろ。寮はアリーナの

入り口から向かって左に400m程だ。ほれ、ルームキーだ、無くすなよ?」

「はあ?ズイブンといきなりな話だなおい。部屋の都合がつくまでホテルから通いじゃなかったか?」

投げられたキーを受け取りながら竜兵は質問する。

「あれか? 世界で二人きりの男性適応者だけに攫われてモルモットになるのを国が危険していると」

「ああ、もう一人の適応者の方はな。お前の場合は振り返りにした人攫い達の対応に追われる

国家機関の人間の心労を私が慮っただけだ」

「あはは、長谷川君だったら良くて半殺しですものね」

「む、確かに言い返せないがな……しかしミシエル、アンタなんで口調が変わってるんだ？」

「え」と、学校ではこのキャラクターで通してるんでヨロシクね、ミシエル・マーディガン26歳です」

「はあ!? アンタ確か四十ろ『口が軽いヤツは早死にすんぞ?』……イエス・ママ」

額に撃鉄を起こしたサンダラーを突きつけられ顔を青くしてコクコクうなづく竜兵と、春風のような微笑を浮かべながら黒いオーラを振りまくミシエルに苦笑しながら千冬は続ける。

「まあ、そういうわけで必要な生活用品はお前の所属企業に連絡して配送してもらえ」

「了解です織斑先生」

「くつ。その口調、似合わんな」

「放つとけよ!」

二人に背を向けてアリーナの出口に向かう竜兵の背後から千冬の声が掛かる

「長谷川、今夜9時に寮長室へ出頭しろ。寮長が話したいことがあるそうだ」

返事は無く、振り返る事無くヒラヒラと右手を振る竜兵を見送りながら、千冬はミ

シエルに話しかける。

「で、どうだった？」

「無理ですね、千冬の一喝がもう少し遅れたら、堕ちていたのは私でしたよ」

「その銃（サンダラー）を2丁持って、尚お前が負けたと言うのか？」

「……、最後の6連射の時な、直撃確定の3発の内1発にわざとぶつかって残り2発の衝撃波圏内から離脱しつつ、爆煙に紛れてダミーと入れ替わりやがった。あの1発でもシールドを削りきれなかったんだ、長引けば負けてたさ。しかもお前が怒鳴る直前やツは『撃つ』つもりだったぞ？ 今思い出しても震えが来らあ、んっん！……怖かったですよ」

「……やれやれ、本当ギリギリだったか」

今日何度目かのため息をつく千冬に、ミシエルはニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべながら質問する。

「でもお、うれしかったでしょ？ もちろん合格よね」

「はあっ!? なっ、何のことだ！」

突然の質問に動揺する千冬を見て、更にニヤニヤしながらミシエルは続ける。

「ん、さあて何のことでしょう？ 千冬って私が彼の知り合いだって知ってから、良

く彼のことを聞いて来たもんね。彼の事気にな『余計なことを言うのはこの口か？』ひタタタ、つねつちやイヤ〜！」

キリキリキリと、ミシエルの頬を振りあげる千冬。右腕一本でミシエルの体を地上から3cm浮かす見た目から想像もつかない腕力は傍から見ると中々に怖いものがある。

一方のミシエルもそんな状況で痛がりこそすれ取り乱した様子が無いのは、慣れのせいではたまたま。

「でもさ、彼なら弟君の事……少しは任せれるんじゃない？」

「……」

右手から頬の皮でぶら下がるミシエルの一言を聞き、千冬は唐突に彼女から手を離し、アリーナの出口へ歩き始める。そんな彼女を見送りながらミシエルはポツリとつぶやいた。

「……素直じゃないねえ。ううん、青春してるね千冬せんせい」

学生寮にて（はじめまして）

—学生寮前—

「おー痛てててつ、軽い関節炎に筋肉の断裂かよ。 2〜3日筋肉痛だなこりゃ」

軽く肩を回しながら自身の状態をチェックする。

あの時6発の魔弾に曝された俺が取った行動は『ISのPIC機能完全停止』だった。
ISに掛かるありとあらゆる慣性を緩和及びベクトル変化させるPIC（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）を停止させる。それだけなら何の意味も成さない行動であるだろうが、要になるのは「ありとあらゆる」慣性制御を停止させるという1点だ。

総重量数百数十kgというISには、その重量での戦闘を維持させるだけの小型なれど強力な動力

機関、飛翔させるための半重力翼機関が内蔵されているんだが。

そしてそれら動力は通常であればPICによって稼働時の振動や加圧状態を緩和されているのだが、俺はあの瞬間ソレをすべて開放した。

あえて名付けるとするならば『脈動加速（パルセイション・ブースト）』

機体に掛かる動力機関の脈動、その上昇点の加圧超過の出力によるパワー補正と、魔弾の衝撃をすべて推進力に替え通常時をはるかに越えるスピードでの回避を成功させたと言うわけなんだが、当然のことながら搭乗者に対するP I Cも切れていたわけで目下全身を襲う筋肉痛と急激なGに対する脳内の猛抗議に辟易してると言うワケである。

「うゝつ、だりいつ！ 眩暈がするつ！ ヒザがググキグキ言う……のは千冬のせいかな」
思いつきは良かったが、停止するP I Cの範囲の調整とかは追々しないとまずいよなあ。動力機関の脈動利用によるパワー補正、研究の余地ありか。

……まずい、I Sって結構面白いわ。何が詰まってるか分からないオモチャ箱的な意味で。

美津里さんに教育された影響かね、結構この手の興味に貪欲な自分に少し驚きだ。

「で、ココがしばらくのお宿となる学生寮（ネグラ）なワケですか〜つと」

学生寮のドアをくぐりエントランスへ移動する。手に持ったルームキーのナンバーは0035、2階の端の方か。

階段階段……つと、ん？ 何だこの視線は!? 辺りを見回すと周囲には俺と同じく新入生だろう女子生徒と思われる少女達。

ヒソヒソ

「ねえ、あれって噂の？」

ガヤガヤ

「……世界で2人しかいない男子操縦者だよね!？」

ザワザワ

「あれって織斑君……じゃ無いよね、長谷川君の方だわ！」

キヤーツ

「目つき悪いけど……怖いけど……、イケメンだ！」

ボソツ

「わあ、背え高い！意外と老け顔？ 同い年……だよね？」

あ、珍しいわけね。 うん、まあ気持ちは分かるさ、散歩してたらママシを飲み込

み掛ける

ウシガエル見つけちゃったみたいな。

うん解る解る、……しかしな？

「待ちやがれつ、誰だ最後に老け顔って言った奴！ 俺あ真正正銘16歳だ!!」

「ぴいいっ！ ごめんなさいっ、怒らないで殴らないで犯さないで!!」

「……だれが誰を襲うんだよ、そう言うセリフはもうちよつとメリハリワガママボディになつてから言いやがれ！」

「うわっ！結構辛口！」

「ああ、でも私もちよつと言われたいかもつ、口汚く罵ってください!!」

あゝ、何このノリは？ さっきのPICカットした時よりも頭が痛くなつた気が。

コミュニケーションは大事だけどな、さすがに今日は退散させてもらうか。このノリに長時間浸つてると間違いなく倒れそうだし。

「あゝ、話が盛り上がつてるトコロ悪いケドさ。今日は朝からイロイロあつてさすがに疲れてるんだわ、お喋りはまたの機会つて事で。な？」

興味深々で話を続けようとする同年生らに謝りつつエントランスを後にするが、一つ忘れてたな。

俺は振り向き、こつちを見ている女子生徒達に自己紹介をした。

「本日から入寮、長谷川竜兵16歳だ。これから3年間よろしくな」

向き直り階段へ向かう俺の背後から

「「っキヤゝゝゝ!!」」

「怖そうな外見に反して意外とフレンドリー！」

「チヨイ悪アニキタイプ男子、キーターツ！」

「思い出したようにさりげなく自己紹介とか、ツボ押さえてる!!」

「ああん、やっぱ罵って欲しい!! そして私を踏んで！」

と、悲鳴にも似た女子の歓声、こつ鼓膜が破れる。 サンダーの銃声に負けてねえよ、……あと

最後の一人、何かヘンな世界が拓け掛かってないか？ 俺は心から心配だ。

それにしても、しばらくはアレが続くのかよ、入学式からしばらくは学園（どうぶつえん）の名物（ぱんだ）状態だな。

もう一人の男子の方に来るだけ多く行ってもらえるように祈りはするものの、1〜2週間は覚悟しておくか。

「にしても、痛えワダルいわドツと疲れるわ、もうしばらくISにや乗りたくねえなあ」
 せめて入学前にPIC制御の方法考えておこう、毎回これじゃ体がもたない、とか今後の予定を考えていたら目の前には0035のプレートが付いたドアが一つ。

一応同居者が居た時の用心に3回ノックをして返事が無いのを確認する。 まさかとは思うが同居者が女で、入室したら着替え中でしたなんてラッキースケベは御免こうむるしな。

返事が無いのを確認した後鍵を開け、ドアノブに手をかけたのだが

「……参ったね」

ドアの向こう、部屋の中に『何かの気配』が一つ。 ノックに反応せずドアの向こう3m先に気配がするということは、誰か寝ているか……待ち伏せているか、だ。

前者なら別に問題ないが、後者なら……。左手はドアノブにかけたまま、右手で胸ポケットに

「隠してあった」日本刀を引き抜く。これで対処できる相手であることを切に願うぞ？

ガチャン

ノブを回し部屋の中を覗くと、部屋の中央には身じろぎ一つせずに40cmくらいのナニかが座って居た。

全身を覆う皮膚は緑がかった鉛色、頭頂部のみ疎らに白髪を生やした顔は老人のソレにも良く似ているが長くとがった耳に鋭い嘴。肋骨の浮き出た体からは細い枯れ木のような手足が生えているが指先には鋭い鉤爪、ご丁寧に蝙蝠の羽と先が三角形に尖った尻尾まで生えてやがる。

明らかに生物図鑑には乗るはずも無い、乗ってはいけないナニカがこちらを見たまま部屋の中央に鎮座していた。

「えくと、……アンタ同居人？」

「……」

渾身のボケはむなしくスルーされたようだった